

## 岡山理科大学英語教育への提案

西岡 啓治

岡山理科大学理学部応用物理学科

(2010年9月30日受付、2010年11月9日受理)

### 1. はじめに

2010年8月に加計国際交流プログラムでUSA、オハイオ州の Findlay 大学に学生8名を引率した。学生の苦労は、食事、宿題などいろいろあったが、コミュニケーションの苦労も大変に大きかった。その時の体験をもとに、英語教育に対して私が考えていた提案をまとめてみたい。その提案は、英語の授業を英語で行うというもので、文部科学省が提案していることと同じである。

### 2. 聞き取りと応答

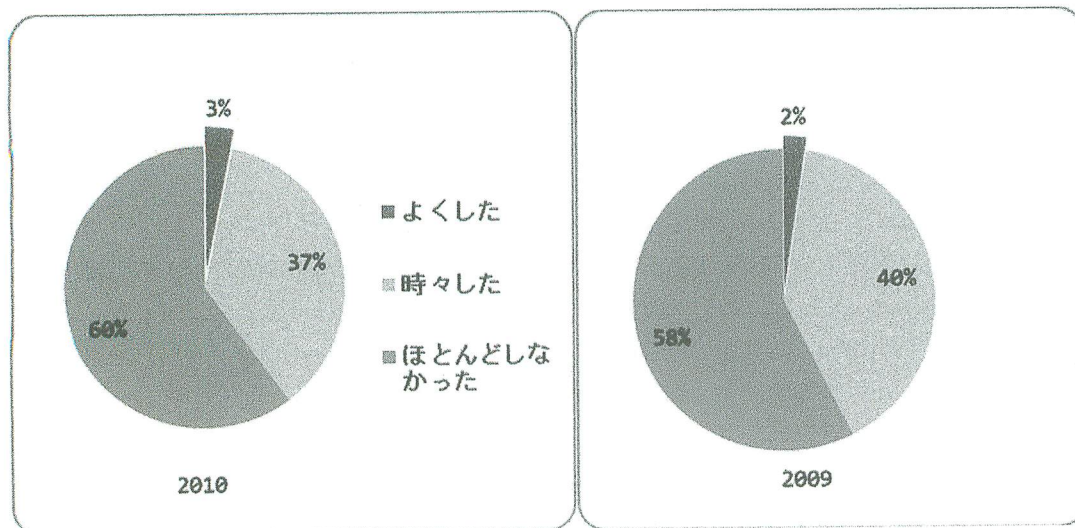
外国語を学習した学生が初めて海外に出たときに体験することは聞き取りのむずかしさである。聞き取ればたとえ返答ができなくても苦労は半減する。先生から”We meet again at Mr. Farmer’s office at 16:00.”と指示されても、状況からそのようなことを言っているとはわかっても、細かいことが聞き取れない。したがってどこへ何時に行けばよいのかわからない。しかしこのような日常的な英語は、英語教員がクラスのなかで日常的に英語を使っておれば、学生もそれほど戸惑うことはなくなるであろう。What time did he say? / Where did he say to go? / Are they meeting in front of the gate? などの英語は基礎的な英文で、基礎的な語彙を含んでいる。聞き取れない原因は、耳がついてゆかないということで、これらの英文が紙に書かれておれば簡単に理解できる。文字なら理解できるが音声なら理解できないというのが、会話ができないと感じる大きな原因である。英語を使って外国の人々と会話をしたいというのは、学習者の自然な願いである。それがいつになってもかなえられないので「10年間英語を勉強したが話せません」と弁解することになる。学校の授業で、あまりにも書かれた英語の学習に偏ったことが、このような結果を作り出した原因と言わねばならない。今から100年以上も前に Jespersen はそのことを指摘している：

So it is no wonder that such [translation centered] instruction scarcely cultivates at all the pupil’s ability to understand a foreign language as it is rapidly and naturally spoken by a native. If he should hear the simplest every-day sentence in a foreign language, correctly and naturally pronounced, and he should be asked merely to repeat it, he would in nine cases out of ten betray the strangest perplexity, although he would have had no trouble whatever with a far more difficult piece which he happened to meet with in print. (1967: 42)

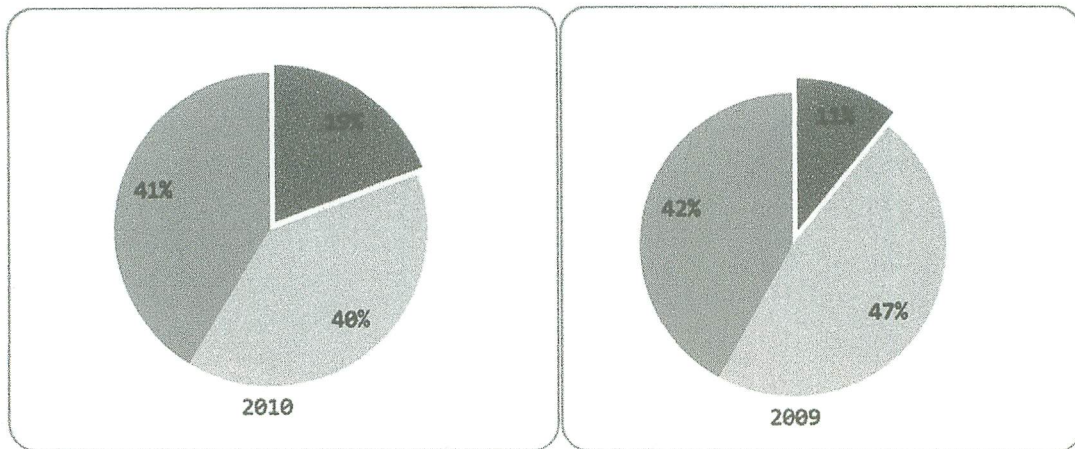
なんと正確に日本の英語教育の結末を言い当てていることか。もしある学生が、別の教授法で同じ時間数教えられて彼の英語コミュニケーション力が上がるとすれば、コミュニケーションができなかったのは教授法が原因で本人の努力不足のためではないことになる。日本で今までどおりの教授法が続けば、状況が改善されることはないであろう。

### 3. 理大学生の英語学習法

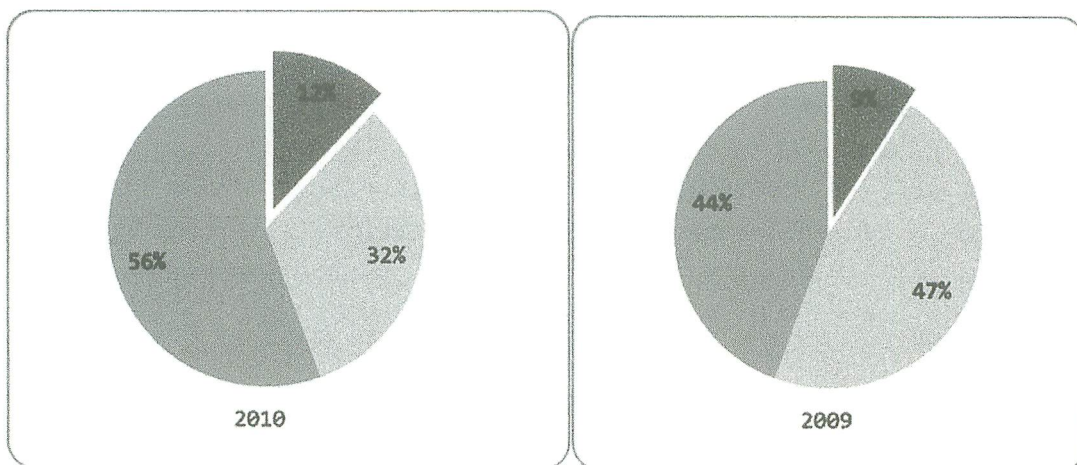
私は昨年と今年の2回、本学の学生がどのような英語学習をしているかのアンケート調査を行った。昨年(2009年度)は2年次生5クラス、1年次生1クラスの合計167名、今年(2010年度)は、2年次生5クラス152名の学生が対象である。きっかけは、彼らの英語学習方法に疑問を持ったからである。正しい学習方法が身につけていないために、英語力が向上しない/上達が遅いのではないかという疑問を持った。学習方法の実態を知るために、三択のアンケートに答えてもらった。尋ねた項目は、(1)英語を聞く練習 (2)英語を書く練習 (3)英語の音読練習 (4)英語を実際に話す練習 (5)予習 (6)復習 (8)文法の知識(品詞)(9)文法の知識(文法事項) (10)単語ノート (11)発音記号 (12)発音記号の書き留め (13)辞書の使用(英和辞典) (14)辞書の使用(和英辞典) (15)英語の苦手、得意、などである。次がその結果のグラフで、2つ並べた左が2010年度、右が2009年度の結果である。以下では、特に音声に関する項目(1)(2)(3)(4)と単語ノート(10)を取り上げて学習方法の問題点を考えてみる。グラフの%は回答者数を%表示に変えたもので(1)(2)(3)(4)は、ハイライトした位置から時計回りで「よくした」「時々した」「ほとんどしなかった」を示す。(10)の単語ノートについては「よく書きとめる」「板書を書き取る」「書かない」への回答である。



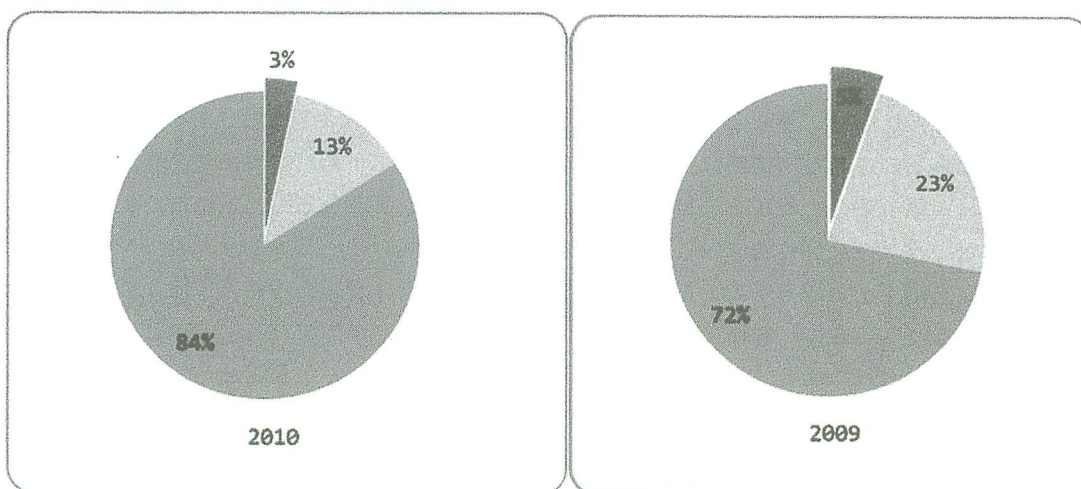
(1) 英語を聞く練習



(2) 英語を書く練習



(3) 英語の音読練習



(4) 英語を実際に話す練習



(10) 単語ノート

(1)は、耳で聞く学習についてである。兩年度とも似たような結果で、学生がこの学習方法を重要視していないことがわかる。積極的にやっていると思われる学生は2-3%に過ぎない。(2)の英語を書く練習はそれに比べると比率が大きくなり、「時々する」まで入れれば兩年度とも60%ぐらいになる。つまり書く練習は聞く練習よりも重視されている。(3)の音読練習は兩年度ですこし違いがあるが、平均的な比率でみれば約10%の学生はよく音読し、「時々する」を入れれば約50%の学生がその練習をしていることになる。(4)の英語を実際に話す練習はもっとも悲惨な数字で、「時々する」を入れても兩年度とも20%前後である。周囲にそのような環境がないことが最大の原因であろうが、教室でもそのような練習が少ないことを表している。さて、これらの練習のうち(1)(4)は文字の助けなしで、耳と口を使う音声練習であり、(2)(3)は文字の助けを借り、目で見に行く練習である。(1)(4)のグループでは、「時々する」を含めてもせいぜい40%の学生がそのような練習をやっているに過ぎないことがわかり、積極的に取り入れている学生は5%に満たない。(2)(3)の文字を介した練習では、「時々する」を入れれば半数前後がその練習を行っており、よく行っている学生も10%を超えるほどいる。このようにグループ分けすると、学習の内容が目を通しての練習に偏っていることが明らかになる。そして耳と口を用いる練習が軽視されていることもわかる。(10)の単語ノートは、語彙を増やすためにはどうしても必要な学習方法である。よく書きとめる学生は約10-20%で、「教員が板書すれば書きとめる」という学生が50-60%である。

彼らが定期試験の前に英語の勉強をするとき、その勉強の中身はテキストの訳であることが多い。文字を見て英語に訳してみるなのである。英語は「訳せればよい」のであって、それ以外はあまり重要ではない、という風潮がある。英語を聞きその音をまねて言う、コツコツと辞書を引く単語帳に記録する、テキストを音読する、といったことは英語に限らずどの言語を学習する場合にも基本的な学習法であろうが、この調査はそのいずれもが不十分であることを示している。このような学習方法の結果、海外に出かけて英語を使わねばならなくなったときに、悲惨な思いをするということにつながっている。しかし、学生側の学習法だけが原因ではない。教員の側も、教室で音声を重視した練習をしておくべきである。そうすれば、彼らの学習方法も変わってくる。文字を見ないで音声のまま理解し、音声で応答するような練習が教室では大いに不足している。コミュニケーションのための英語学習というゴールに到達するためには、学習スタイル、教育スタイルの両方をそれに合ったものに変える必要がある。聞いたり話したり、現実生活の中でことばを使うような練習を取り入れる Communicative Approach の教育方法を研究すべきではないか。そのためには、まず教員がもっと英語を使って教えることから改革が始まるのではないかと私は考える。

#### 4. 音声重視教育のアイデア

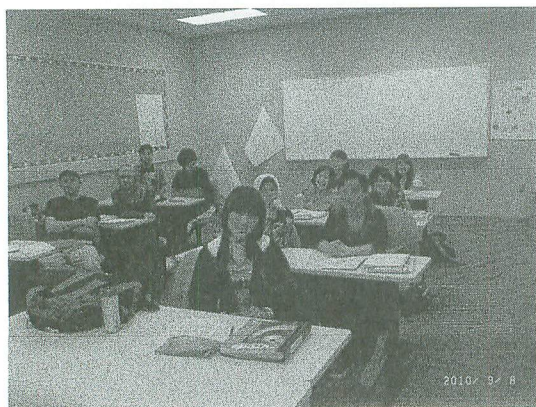
それでは、どうすれば我々日本人英語教師が英語で授業をおこなえるか。大学の一般教養の英語の時間は1週間にせいぜい1-2回であることを考えると、文法の説明、テキストの理解などをどうやって英語で行うかは難しい問題である。今やっていることを英語に置き換えて話すことはほとんど不可能であり、無意味であろう。私が今回 Findlay 大学の IELP (Intensive English Language Program) のクラスで体験したことを参考に、われわれ日本人の教師にもできそうなことを考えてみたい。

Findlay 大学の IELP は、他の大学の場合も同じであるが、学部、大学院での講義に備えることが目的である。したがってプレースメントテストでレベル1に入った学生も、学部の学習に出席できるためには、レベル4まで到達しなければならない。したがって授業は当然、Listening, Speaking, Reading, Writing の4技能いずれをも鍛えるプログラムになっている。科目名としては、Composition (Writing に相当)、Reading の2科目が午前中に、Listening for Specific Purpose, Communication Skills (Speaking に相当)、Grammar が午後に組まれている。9:30 から 16:50 まで、曜日により 50 分と 75 分の授業が組まれており学生は各自のレベルに応じて1週間に16の授業を受講する。1クラスの学生数は18人で、サウジアラビア、中国、韓国、日本、中南米諸国の学生が入り混じったクラスである。先生は教室内での会話は英語で行うことを要求し、同じ国の学生が母国語で話すのを禁じていて、たとえばアラビア語が聞こえると Beck 先生は “Mr. Beck does not like to hear Arabic.” と言って注意する。テキストは、Communication Skills 用、Reading 用、Grammar 用などというようにそれぞれのコースに合わせたテキストを用いている。先生が話すスピードは人により異なるが、どの先生も明瞭に話すことを心がけ、白板やパワーポイントを用いて、問い、その答え、語彙や内容についての説明を丁寧に行う。先生によっては、補助プリントも用意されている。宿題も出し、その答えは分かりやすく板書やパワーポイントを使って示す。語彙や事柄についての説明では、自分の家族のことを言ったり、絵を描いて説明したり、利用できるものは何でも利用して、学生が理解しやすいよう気を配っている。たとえば、テキストに “third generation” という言葉が出てきたときに、A 先生 (Level 3, Reading class) は：

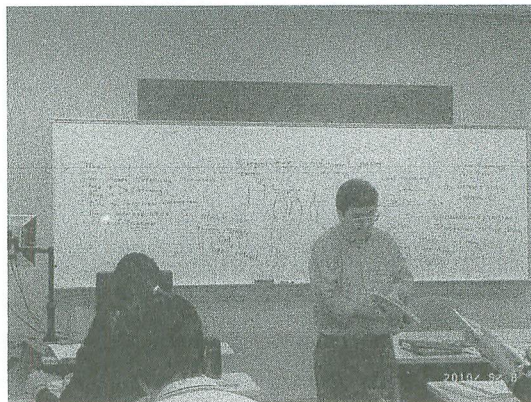
“I was born in California. My father came from Hungary and my mother is a Mexican. They met in the University of California when they were students there. I got married with my wife and we have two children. So I am not a third generation.”

というような説明を加える。Level 3 だと、このくらいの英語は聞き取っている学生が多い。また B 先生 (Level 3 “Communication Skills” のクラス) は “catch a cold” というフレーズが出てきたとき “What are cold symptoms?” と尋ねて、学生の答えに加えて “cough/ running nose/ chills/ sneezing/ headache/ . . .” とジェスチャーを交えながら板書した。単語を増やす工夫としてよい方法だと思う。また C 先生 (Level 1, Composition) は、テキストの話題に関係して “Yesterday we went to see my grandmother. She is 90 years old. Do you have a grandmother of 90 years old?” と質問していた。Level 1 は、まだ学年が始まったばかりということもあり、まったく何を言われているのかもわからない学生もいるようだった。これらの授業を参観しての印象は、(1) 授業の予定を立ててその通りに進める。予定を白板の隅に学生にもわかるよ

うに書いてから授業する先生もいた。したがって 50 分ないし 75 分の授業を効率よく使い、いずれのコースのテキストも 100 ページを超える分厚さであったようだが、取り上げる個所、取り上げない個所を決めて進めていた。補助的なプリントを用意したり、宿題を出し、授業毎の関連が途切れない工夫をしていた。(2) 明るい雰囲気での授業を進めていた。プライベートな話も交えながら、学生とのやり取りを頻繁に取り入れ、一方的な講義にならないよう工夫されていた。学生の質問を大切に、それを授業の改善につなげる。学生が集中できるように 75 分の授業の場合は 35 分でブレイクを入れる先生もいた。岡山理科大学は 90 分授業であるが、これは学生の集中力を保つためには長すぎるのではないかと思う。言語学習には 1 時間程度が適当ではないかと、授業に加わってみて感じた。



IELP の学生



授業風景

IELP は文字通り集中英語講座であるからそのまま真似はできないが、すべての授業を英語で行うという点はある程度真似ができるのではないか。IELP のクラスのように教員が英語で授業をすれば、学生も英語を使うようになってゆく。指示を英語で言ったり、語彙を英語で言い換えたり、説明のために自身のことを言うなどは、われわれにもできることである。そのような教え方が Communicative Approach であろう、訳読方式とは大きく異なる教育方法である。

## 5. 教室での公用語

英語教育改善のためには、文部科学省の言うように英語の授業は英語で行う、という方法に私は賛成である。しかし中学校、高校で現在一般的に行われているやり方—日本人の英語教師が日本語をたくさん使って英語を教える—を明日から変えることは、できない相談である。そこで、その大目標に到達するためには「英語のクラスでは英語が公用語である」という考え方で合意することが重要である。そして日本語を使う場合は、方言／民族語を使っていると考える。その考え方で何年かを経過すれば、公用語＝英語の使用が広がり、標準語が広まるように授業での言語は英語というのが当然になってゆくであろう。

岡山理科大学の英語クラスは、ほぼ全員が日本人であることが多い。アラブ、中国、韓国、メキシコなどから来た学生がいる国際色豊かなクラスではない。その点が Findlay 大学の IELP 教室と大きく異なる点である。日本人ばかりのクラスのなかで、すべてのコミュニケーションを英語で行おうとすれば、まずそのように「英語クラスの公用語は英語」であることを合意する必要がある。そこに到達するためには、教員が英語で授業をする時間を少しずつ長くしてゆくように心がければよい。日本語も使い、英語も使うという二刀流のやり方である。学生のレベルを考えながらできるだけ英語で説明する。日本語訳は極力避ける。学生には英語で質問し、英語で返答を求める。その繰り返しで、教員も学生も英語での授業にいつかは慣れてくる。

少なくとも、学生が耳（聞き取り）と口（応答）を使う時間を増やさねば、Jespersen の指摘通りの状況が続く。

ことばで言うのは簡単だが、実際は多くの問題が解決されなければならない。学生側の問題もある。最大の問題はモチベーション＝学習の動機付け、である。英語の必要性を感じていない学生に対して英語で授業をしても、いよいよ英語がわからなくなってあきらめてしまう学生もでてくるであろう。現行カリキュラムは、必修科目として1年次に英語、2年次に科学英語を学習する。どちらの科目も選択ではなく必修科目である。学生は1年次では「多様化度テスト」の結果で、2年次では「多様化度テスト」と1年次での英語 I, II の成績の合計点を使用して、3レベル（S-A-B）のいずれかに振り分けられる。一クラスのサイズは30人前後と多めである。IELP のクラスとはさまざまな点—国籍の多様性、学習の動機、クラスサイズ、教員の英語運用力、など—で異なる。そのように、障害はあるけれども、やはり英語は英語で教えるべきである。Anne Lazaraton は EFL クラスと ESL クラスでの英語教育の困難さについて “Teaching Oral Skills in an EFL Context” と題する章で次のように言う。私には、日本のことに言及しているように思われるので、少し長い引用しておく：

This chapter is primarily written with the ESL teacher in mind, teaching a heterogeneous (by native language and ethnicity) class of learners in an English-speaking environment. However, homogeneous EFL classes, where all students speak the same first language and English is not used outside the classroom, present certain additional challenges for the teacher. In a survey of EFL teachers, Nunan . . . found the biggest challenges in the EFL classroom to be lack of motivation, getting students to speak (a cultural issue for some where speaking in class is prohibited except when called on), and the use of the first language.<sup>1</sup> In addition, large classes are often the norm overseas, limiting both student opportunities to talk and teacher opportunities to provide feedback. Other problems may arise if the curriculum does not stress speaking skills or views them solely as an avenue to grammatical accuracy; furthermore, if the teacher is a non-native speaker of English, he or she may not be competent or confident in speaking English. (Celce-Murcia ed. 2001:110)

このような状況のなかで EFL teachers ができうる教育方法について次のようなアイデアを紹介している：

While solutions to these problems are beyond the scope of this chapter, some general suggestions can be made. When teaching speaking skills, EFL teachers need to be particularly adept at organizing class activities that are authentic, motivating, and varies. The use of authentic, engaging materials should be the basis for in-class activities. If the necessary technology is available, showing movies or recorded television programs and playing audiotapes of programs can be enjoyable for students and can provide them with authentic practice in listening to native speaker speech. (ibid.)

EFL 教員は、学生に speaking の指導をするにはさまざまな工夫を要する、まずは魅力的で変化に富むネイティブの話すリスニング教材を使うことが speaking を教える基礎であるという指摘である。

英語の授業で先生が英語を使わないのは、国際的に見れば特異な現象のようである。私は ALT として私のクラスを手伝ってくれるネイティブが来た場合には、たいてい彼らの学習した外国語が何か、またどのような先生に教えてもらい、その際どの言語で教えられたかを尋ねてみる。アメリカでは高校時代にスペイン語を習ったという人が多い。そして最初はアメリカ人の先生から基礎的なことを習い、その後はスペイン語のネイティブ、あるいはアメリカ人の先生からスペイン語で習うと答える。言語学習は、一種の習慣形成であるから、日本語で説明ばかり聞くより、多くの英語を聞いて耳を慣らすほうが原理に適っているのではない。また学習する側にも、正しい勉強の方法を教えることになる。英語教員は音声が大切であることを強調し、声に出して読むことを勧める。しかしそれは練習のための練習であり、現実の生活で英語を使ったことにはならない。中学から大学まで、どの年代、どのレベルであっても、教師が英語で教えれば、学生は自然に聞く英語に慣れる。学生が質問し、問いに答えるなどしてくれるようになれば、彼らは話す英語にも慣れてくる。英語で教える場合、教員も間違った英語を使うであろう。学生も誤解し、間違った英語で答えることが多いであろう。お互いにそれを恐れず、その繰り返しから上達が始まると考えて進まねばならない。教員が日本語で説明するばかりなら、英語運用力はお互いに向上しない。

## 6. 将来の方向性・課題

小学校での英語教育が 2011 年度から本格化し、5-6 年生は英語の授業が始まる。また、中学では 2012 年度から、高校では 2013 年度から、新しい指導要領が実施される。高校での英語授業については「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業を英語で行うことを基本とすること。」(『高等学校学習指導要領解説 p. 77)と謳っている。世界の流れに合わせた英語教育にしようとしていることがうかがえる。そのような授業を受けた高校生が 2016 年 4 月に大学に入学する。英語でのコミュニケーション力を高めようとしている点は大学も高校も同じであるのに、大学では英語でなく日本語で英語の授業を受けることになればおかしな話である。岡山理科大学の向かうべき方向・その課題として、私は先ずコミュニケーションのための英語教育を模索しなければならないと思う。現行カリキュラムで、1 年次での英語 I, II はそれが目的の科目である。2 年次での科学英語 I, II は、科学的な文献の講読を目的にしている。講読が目的であると、4 技能の内の他の 3 つの技能(聞き、話し、書く)が後回しになりやすい。つまり、これまで日本で続いてきた文法訳読法(Grammar-Translation Method)が継続されやすい。それが問題であることはこれまで議論してきたとおりである。われわれが追求すべき方向は、いかにして 4 つのコミュニケーション技能のバランスをとりながら科学英語を教えるか、Communicative Approach の中で具体的な方法を見つけてゆくことである。再び Lazaraton のことばを引いて警鐘としたい:

The impact of communicative competence theory on second and foreign language teaching cannot really be overstated; few ESL materials published in the last decade or so fail to claim that their materials reflect “the communicative approach.” What features of this theoretical approach are relevant to teaching oral skills? Perhaps the most obvious way in which oral skills pedagogy has evolved as a result of this theory is that it is no longer acceptable to focus *only* on developing the grammatical competence of our students, as was the case with a number of language teaching



methodologies which were popular in the past. Today, teachers are expected to *balance* a focus on accuracy with a focus on *fluency* as well. (Marianne Celce-Murcia. (ed.). 2001: 104)

Communicative Approach は、過去のさまざまな言語教育法での試行錯誤の後にやっととり着いた”oral skills”を教えるための方法である、後戻りしてはならないのである。Lazaraton の指摘するように、これからの英語教育は、形式の学習 (grammar) と意味の伝達 (fluency) の両者をバランスよく教えなければならない。それが学生が英語を現実を使うことができるようになるための方向である。

### Note

1. “the first language”は、“the second language”の間違いではあるまいか。EFL 学生が英語 (second language) を使ってくれない、ということであろうから。

### References

Celce-Murcia, Marianne. (ed.) 2001. *Teaching English as a Second or Foreign Language*. 3<sup>rd</sup> edition. Boston: Heinle & Heinle.

Jespersen, Otto. Trans. Sophia Yhlen-Olsen Bertelsen. 1904. 1967. *How to Teach a Foreign Language*. London: George Allen & Unwin,

文部科学省『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』2009. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/index.htm)

**A Proposal**  
**for**  
**English Education at Okayama University of Science**

Keiji NISHIOKA

*Department of Applied Physics, Faculty of Science, Okayama University of Science*

*1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama-shi, Okayama 700-0005, Japan*

(Received September 30, 2010; accepted November 9, 2010)

This summer, I took eight students from Kake educational group universities to the University of Findlay, in USA, a sister university of Okayama University of Science. The students had difficulty in English communication. Both from this experience and from the examination of a questionnaire which I gave to my English class students to investigate their English learning strategy, I examined the reasons for the communication difficulty which most Japanese people experience when exposed to an English speaking environment. The difficulty is caused by the poor aural-oral training in English class. I would strongly like to propose that Japanese English teachers should use more English in English class. To improve the communicative skills of Japanese people, English teachers have to change first. They have used too much Japanese when they teach. English class should be taught in English. This approach will eventually change English classes to more communicative classes. In Okayama University of Science, English teachers have to develop a communicative teaching method in the English subjects, especially in Science English.